

# 19世紀フランス児童出版物における 「ものを書く人形 (poupée de lettres)」の展開

—人/モノの〈母〉-〈娘〉関係をめぐって

“Poupée de Lettres” in 19th Century French Children’s Literature: an Analysis of the pseudo-Mother-Daughter Relationship surrounding Humans and Objects

谷口 奈々恵

TANIGUCHI, Nanae

## はじめに

少女たちの意のままに愛され弄ばれる無力なオブジェであり、美しいが無知で愚かな女性の象徴とされてきた“モノ”たちが、物語の世界において生命を吹き込まれ、さらにはペンを与えられたとき、彼女たちは何を感じ、考え、語り始めることとなるのだろうか。

美しく煌びやかな女性型の人形 (poupée) が上層階級の女性たちの中で流行を極め、専門的な産業として発達していた19世紀のフランス。現実の社会において特異な存在感を示していた人形は、同じく当時隆盛を迎えていた児童文学の世界にも次々と姿をあらわしひとつのジャンルをなすまでに至っていた<sup>1</sup>。子どもの代表的な玩具である人形が児童文学のモチーフとして登場することは現在においても珍しいことではないが、当時出版された作品群に見られる特徴のひとつが、人形に執筆する能力が与えられたこと——すなわち、みずからの意志や思考を有し、日記や回想といった文章を綴る「ものを書く人形 (poupée de lettres)」が登場したことである。

本論文の目的は、人形が執筆の主体となったこれらの児童文学作品を対象に、作中において人形に与えられた役割とその展開方法に対する分析を通じて、実在するモノであると同時に架空のキャラクターでもあった人形という存在が当時の上層階級の女性たちといかなる関係を取り結び、彼女たちの生においてどのような位置を占めていたかを明らかにすることである。まず第1章において当時のブルジョワ女性をめぐる社会的状況を踏まえ、人形が一般的に少女教育の道具とみなされてきたことを確認したうえで、第2章において「ものを書く人形」を登場させて人気を博したジュリー・グロー (Julie Gouraud) の『人形の回想録——少女に捧げられたお話 (Mémoires d’une poupée, contes dédiés aux petites filles)』(1839) とヴィルブランシュ夫人 (Mme de Villeblanche) の『シャルマントの思い出 (Souvenirs de Charmante)』(1865) という二つの児童文学作品から、「ものを書く人形」が読者の女性に対して担っていた〈母〉としての役割を考察する。第3章において、同じくヴィルブランシュ夫人が編集長を務めた少女雑誌『模範的な人形——少女の雑誌 (La poupée modèle : journal

1 人形をテーマとする児童文学作品を「la littérature de poupée」や「le roman de poupée」と総称して考察したものとして、以下の論考がある。Marie-Françoise Boyer-Vidal, « L’éducation des filles et la littérature de poupée au XIXe siècle. » dans Bernard Bodinier, Martine Gest, Marie-Françoise Lemonnier-Delpy (dir.), *Genre et éducation : former, se former, être formée au féminin*. Mont-Saint-Aignan, Presses universitaires de Rouen et du Havre, 2009. Laurence Chaffin, « Le roman de poupée ou le modelage des consciences », *La revue des livres pour enfants*. n°222, avril 2005, pp. 103-110.

2 19世紀フランスの「人形」を扱った女子教育史やジェンダー史、児童文学の研究の代表例として、以下が挙げられる(註1も参照のこと)。Leïla Sebbar-Pignon, « Mlle Lili ou l'ordre des poupées », *Les Temps modernes*, n° 358, mai 1976, pp. 1795-1828. Marie-Françoise Lévy, *De mères en filles : l'éducation des françaises, 1850-1880*. Paris, Calmann-Lévy, 1984, pp. 36-46. Gabrielle Houbre, *Histoire des mères et filles*. Paris, Éditions de La Martinière, 2006, pp. 62-66. Marie-Christine Vinson, *L'éducation des petites filles chez la Comtesse de Ségur*. Lyon, Presses universitaires de Lyon, 1987. Francis Marcoin, *La comtesse de Segur ou le bonheur immobile*. Arras, Artois presses université, 1999. Michel Mansonは、西欧の玩具の歴史に関する包括的な研究の中で、女兒向けの人形に関する考察を行っている。Michel Manson, *Jouets de toujours : de l'Antiquité à la Révolution*. Paris, Fayard, 2001. また、19世紀から現代に至るまでの「ファッション・ドール」と総称される人形の系譜を辿った Juliette Peers は、19世紀フランスの人形について、ファッションやジェンダー、セクシュアリティの観点から論じている。Juliette Peers, *The Fashion Doll : from Bébé Jumeau to Barbie*. London, Bloomsbury Academic, 2004.

3 Pierre Larousse, *Grand dictionnaire universel du XIXe siècle : français, historique, géographique, mythologique, bibliographique....* T. 8 F-G. Paris, Administration du grand Dictionnaire universel, 1866-1877, p. 369.

4 たとえば以下。Jean-Baptiste Fonsagrives, *L'éducation physique des jeunes filles, ou Avis aux mères sur l'art de diriger leur santé et leur développement*. Paris,

*des petites filles*』(1863-1924)の一部の号とその関連作品を対象に、現実とフィクションの世界を横断するかたちでなされた「母」としての人形の展開、人形という存在を介して結びついた女性同士の想像上の関係性について検討を進めていく。

## 1. 少女教育の道具としての人形

これまで主に女性史や児童文学の分野で指摘されてきたように、19世紀のフランスにおいて女性型の人形は、人間の女性と極めて密接に結びつけられていた<sup>2</sup>。ラルース(Larousse)『19世紀世界百科事典(*Grand dictionnaire universel du XIXe siècle*)』(1866-1867)の「少女(fille)」の項目には、木登りをしたり武器をもったりと騒々しい遊びが好きな男子に対して、繊細な気質を有する女子は人形の髪を整えたり着替えさせるものだと記されており<sup>3</sup>、当時の医学書、母親向けの教育指南書をはじめとする知識人による言説には、人形が少女の教育に有益だとする見解が数多くあらわれていた<sup>4</sup>。

これらに示された人形と女性の関係をめぐる考えは、主に次の二つの側面にまとめることができる。第一に、当時の洗練された衣服を纏った女性の容姿の人形は、美しく身を飾りながらも軽薄な、自律性の欠如した女性を表象するものとされた<sup>5</sup>。第二に、特に19世紀以降に顕著になった側面であるが、人形は人間よりも小さなヒトガタであるために、子どもの代理物として、少女たちに母親の育児をシミュレーションさせるのに有用だと考えられた。すなわち人形は、みずからが体現する美しく主体性のないオブジェとしての女性の理想像を少女たちに示しながら、タブーであった生殖の問題に触れさせることなく子どもの世話に励むよう促すことによって、男性の性的対象でありながら良き母たるべきという、必ずしも互いに相容れることのない性質を自然に教育することを期待されていたのだ。前世紀にJ.J. ルソー(Jean-Jacques Rousseau)が『エミール(*Émile*)』(1762)において述べていたように、少女は夢中で人形に服を着せ替えながらやがては「自分自身が人形となる」のであり、ジュール・ミシュレ(Jules Michelet)が『女(*La femme*)』(1859)において語ったように、人形は少女たちに母親の模倣をさせると同時に、本能としての「最初の愛」を目覚めさせるのである<sup>7</sup>。

児童文学に姿をあらわした人形たちの主たる役割もまた、女性の理想的な資質や振る舞いを少女たちに身につけさせることであったといえる。人形の登場する物語作品の多くにおいて、少女は両親などの年長者から人形を与えられ、「小さなママ(*petite maman*)」としてそれを大切に扱い世話することを通じて母親や女主人、主婦の



【図1】A・ノエル「人形遊び、あるいはお嬢さんのお年玉」(1806)

役割を実践する【図1】<sup>8</sup>。これらの作品は、ジェンダー規範を教育する道具としての人形の側面を物語として示すことにより、適切とされる人形遊びのマニュアルとして機能していたといえよう。

しかしながら、フィクションの世界において人形は単に人間による行為の客体であるばかりではなかった<sup>9</sup>。人形はときに生命を与えられ、あたかも本物の人間であるかのように動いたり、歩いたり、喋ったりしており、さらには本稿の冒頭で述べたように、一部の人形たちはみずからの意志や思考、自身の言葉を語り執筆する能力を与えられることとなった。人形が執筆の主体となる作品において、人形の語りは一人称で進行し、人形として経験した日々の生活や自身の経験の記録が、日記や回想といった体裁で綴られていく<sup>10</sup>。これらの作品において人形は主に少女たちの所有物として登場しており、少女の行動や振る舞いを人形の視点から判断し、現実の読者である少女とその母親に報告する主体となる。人形は、少女によって「教育される人形 (poupée éduquée)」から少女を「教育する人形 (poupée éducatrice)」へと変貌を遂げて少女を教化してゆくこととなるのであり<sup>11</sup>、ベネディクト・モニカ (Bénédicte Monicat) が指摘するように、人形の配置された少女の部屋は「パノプティコン的な家 (un foyer panoptique)」として巧妙に監視を機能させることとなる<sup>12</sup>。

しかしながら教育にとっての都合の良さという側面はもちろんあったはずとはいえ、フィクションの世界において人形に言葉を与えるという行為自体に込められた動機や欲望には、他にもいくつかの観点から光を当てることができるだろう<sup>13</sup>。本稿においては人形が人間の女性を表象するモノであったという点に着目し、「ものを書く人形」のモチーフを、当時の社会における女性と「書く」ことをめ

Hachette, 1869, pp. 101-102.

5 村田京子は、エミール・ゾラ (Émile Zola) 『獲物の分け前 (La curée)』(1871)の登場人物ルネをはじめとして、当時の文学作品における客体的な女性像としての「人形」のモチーフについて考察している。村田京子『イメージで読み解くフランス文学——近代小説とジェンダー』水声社、2019年、170-180頁。

6 ルソー『エミール(下)』改版、今野一雄訳、岩波文庫、2007年、32-34頁。

7 ジュール・ミシュレ『女』大野一道訳、藤原書店、1991年、87頁。

8 たとえば次のような作品がある。A, Noël, *Les Jeux de la poupée, ou Les Etrences des Demoiselles, composés de 7 gravures en taille-douce avec une explication en vers français*. Paris, A. Noël editeur, 1806. Jules Jean Antoine Baric, *L'éducation de la poupée*. Paris, Arnauld de Vresse, 1857. Adrien Marie, *Jeu de la Poupée*. Paris, Ch. Gillot, 1881. Pierre-Jules Hetzel, *La poupée de Mademoiselle Lili*. Paris, J. Hetzel, 1886.

9 たとえば次の作品では、少女の乱暴な振る舞いを受けた人形が、少女の夢のなかで彼女と入れ替わり、人形になった少女に対して仕返しをする。Marie Guerrier de Haupt, *Les Métamorphoses d'une poupée et d'une petite fille*. Paris, B. Béchét, 1868.

10 人間以外の犬やロバなどの動物、道具などのモノが一人称形式で語る物語は、当時の児童文学にもしばしば見られた。Bénédicte Monicat, *Devoirs d'écriture. Modèles d'histoires pour filles et littérature féminine au XIXe siècle*. Lyon, Presses universitaires de Lyon, 2006,

pp. 81-96.

11 Boyer Vidal, *op. cit.*

12 Monicat, *op. cit.*, p. 101. 人形をテーマとする児童文学は同時期の英国でも流行しており、以下の論考では本稿で扱った『人形の回想録』の英訳版も含むそれらの作品について、少女の監視者としての人形の役割が考察されている。Eugenia Gonzalez, “I sometimes think she is a spy on all my actions’: Dolls, Girls, and Disciplinary Surveillance in the Nineteenth-Century Doll Tale” *Children’s Literature*, vol. 39, 2011, pp. 33-57.

13 たとえば文字を書くオートマタがすでに制作され、人間の声を記録することが試みられていた当時、モノとしての人形に言葉を与えることは急速な科学技術の進歩の只中であつた人々の夢でもあつた。次のような一部の児童文学作品において、人形はしばしば魔法使いや発明家といった人物によって生命を与えられる。Marie Guerrier de Haupt, *Histoires de sept poupées racontées par elles-mêmes*. Paris, B. Béchét, 1869.

14 村田京子『女がペンを執る時——19世紀フランス女性職業作家の誕生』新評論、2011年、17頁。

15 私的な日記をつけることは、それ自体が当時のブルジョワ家庭の女子に特有の、教育上の重要な日課とみなされていた点にも留意すべきだろう。このテーマについては以下の文献に詳しい。Philippe Lejeune, *Le moi des demoiselles : enquête sur le journal de jeune fille*. Paris, Éditions du Seuil, 1993.

16 本稿で参照したのは以下の版である。Julie Gouraud, *Mémoires d’une poupée, contes dédiés aux petites filles*. Paris, A. Bédélet, 5<sup>e</sup> éd. 1860. 本作品の

ぐる問題系のうちに位置づけてみたい。19世紀を通じて文学や出版の世界は依然として男性中心であり、執筆に携わる女性たちは家庭や社会の秩序を乱すことになりかねないと恐れられ、「もの書き女 (femme de lettres)」や「ブルーストッキング (bas-bleu)」、「学者ぶる女 (pédante)」と揶揄されていた<sup>14</sup>。

女性が創作しそれを世に出すことが困難であった時代において、少女向けの道徳的な児童文学は例外的に、女性が執筆を認められ推奨されたジャンルであった。限られた執筆の場であった児童文学において、彼女たちは人形に語らせることによって、何を描こうとしていたのか。女性型のオブジェである人形が、知能や思考、感情を有する語りの主体となることにはいかなる意味があり、言葉を用いて自身の経験を書き記す能力を与えられた彼女たちは、同じく女性と想定される読者たちに対して、何を伝えることとなったのか<sup>15</sup>。次章以降では、「ものを書く人形」が登場する複数のテキストの分析を通じて、これらの問いを検討していきたい。

## 2. 〈母〉としての「ものを書く人形 (poupée de lettres)」

### 2.1. ジュリー・グロー『人形の回想録』(1839)

執筆の主体となる人形が登場した先駆的な作品が、当時の代表的な児童文学作家ジュリー・グローの『人形の回想録——少女に捧げられたお話 (Mémoires d’une poupée, contes dédiés aux petites filles)』(1839)である<sup>16</sup>。本作品は語り手であるヴェルメイユ (Vermeille)

という人形がパリの玩具店に商品として陳列されているところから開始され、ある家庭で一定の期間を過ごしたのち、何らかのきっかけによって別の少女の所有物となることを繰り返し、様々な家庭のもとを転々とする彼女の人生が綴られていく【図2】。

本書の特徴のひとつは、回想録の本文以外にも複数の異なるレベルの語りによるテキストが配置され、それらによってヴェルメイユの回想録の本文がメタ的に



【図2】グロー『人形の回想録』第5版(1860)挿絵

位置づけられている点にある。なかでも序文では「ヴェルメイユの友人 (un Ami de Vermeille)」という男性の人物が、少女の教育における人形の役割、ヴェルメイユとその回想録の性質や意義について自身の見解を綴っている。

序文の筆者が語る人形の役割に関して特徴的なのは、人形を通じて学びを得るのは実際に人形遊びを楽しむ娘だけではなく、その母親もまた人形を通じて、子育てについて教わることができるとされる点である。というのも娘が人形と遊ぶ姿は「あなた自身の正確な鏡 (un fidèle miroir de vous-même)」となる、つまり娘の人形に対する接し方にはその娘に対する母親の接し方が反映されるからであり、少女と人形の会話に1時間耳を傾ければ、当時の著名な教育者エメ・マルタン (Aimé Martin) の本を読むよりも多くを学ぶことができるとされる<sup>17</sup>。人形は母と娘の間であって、各々に関係を取り結びながらその両者を媒介し、ある女性に一生を通じて学びを与える教育者のような存在とみなされるのである。

ここで呈示された人形の教育者としての資質について、序文の筆者はさらに次のように論を進めていく。筆者は冒頭からヴェルメイユという人形の回想録がどのような性格を備え、それをいかに捉えるべきかについてみずからの見解を論じていくが、一連の叙述において特筆すべきは、人形であるヴェルメイユと彼女の回想録を、歴史に名を残す人物や彼らに関する著作と同列に並べて語りながら、それらとの差異化が図られていく点にある。ヴェルメイユが記した回想録を、たとえば筆者は次のように位置づける。

この作品を公開できることを嬉しく思います。その有用性によってフェヌロンの『女子教育論』、ネッケル・ド・ソシュール夫人やレミュザ夫人の本、教育に関するあらゆる本の隣にごく自然に位置づけられ、冒険物語という点ではテレマックの冒険や若きアナカルシスの旅行記の隣に置かれる作品を。さらに歴史的な関心としては、『枢機卿の回想録』、あるいは…カエサルの『ガリア戦記』の系譜でさえあります！ けれど、ヴェルメイユが征服したのは、人々の心だけです。<sup>18</sup>

いずれも古典的な地位を確立している教育論、冒険物語、戦記などのタイトルを挙げたうえで、ヴェルメイユの回想録もまたそれらに並ぶ著作であると述べつつ、しかしカエサルのような軍人とは異なり、ヴェルメイユは人の心のみを征服するのだと付言される。

続けて筆者は、ヴェルメイユと同じく回想録を執筆した歴史的な著名人を引き合いに出して比較する。ナポレオンの秘書であったブーリエヌ (Bourrienne)、晩年のナポレオンによる回想の談話を書き

初版は1839年に『人形の回想録、少女に捧げられたお話 (Mémoires d'une poupée, contes dédiés aux petites filles)』として刊行されたのち、その続編『続・人形の回想録、少女に捧げられたお話 (Suite des Mémoires d'une poupée, contes dédiés aux petites filles)』(1840)が出版された。本論文で扱った第5版は、両者がひとつの物語として編み直された状態で刊行されている。なお、グローはのちに『二体の人形の手紙 (Lettres de deux poupées)』(1864)と題された、人形が書簡を交わす形式の作品も著している。

17 Gouraud, *Mémoires d'une poupée, contes dédiés aux petites filles*, p. 3.

18 *Ibid.*, p. 4.

19 *Ibid.*, p. 5.

20 なお、序文の筆者がとりわけ強く非難しているのがルソーの『エミール』である。エミールは単なる「マネキン」でしかなく、人形と違って「決して存在しない」、「悪の精神の産物」であり、両者を比べるのは「ヴェルメイユに対する侮辱」だと述べる。著者が『エミール』におけるいかなる点を非難していたか、この箇所のみでは定かではないものの、前述のように客体的で自立性の欠如した人形=女性観を呈示したルソーが、人形を称揚する序文の筆者によって批判されている事実は興味深い。*Ibid.*, p. 5.

21 *Ibid.*, p. 4. 下線引用者。

とめ編集したラス・カーズ(Las Cases)、『アドルフ(Adolphe)』(1816)の著者でもある思想家のコンスタン(Constant)といった政治的な重要人物を挙げ、ヴェルメイユの名を併置する。ただしここでも、彼らが罪深く、陰気で厭世的で恨みがましいのに対して、ヴェルメイユが優しく善良で、感じが良いと同時に、これらの著作を風刺するような性格を有するという記述が直ちに付け加えられる<sup>19</sup>。「回想録」とは本来、戦争や革命など政治的事件について特に当事者の視点から語られた文学ジャンルのことであり、その著者として名の挙げられた人物たちは、本書の出版された七月王政時に、読者層のブルジョワ階級の人々によってその思想が危険視される存在であった。ブルジョワ家庭で少女と親密な関係にある人形ヴェルメイユはあくまでも、社会の安定を脅かす人物たちとは区別されなくてはならなかったのだらう<sup>20</sup>。

執筆に携わり自身の思想を綴りながらも、ブルジョワ社会の秩序を乱すことのないよう配慮する姿勢は、当時の女性を取り巻く社会的状況に対する見解にも読み取れる。

ヴェルメイユは、ものを書く人形ではまったくありませんし、決して「ブルーストッキング」をはくこともありませんでした。彼女の筆は新しく、100冊の重厚な連載小説や100冊の古い物語によって鈍ったりもしていません。類い稀な資質があるにもかかわらず、ヴェルメイユは人形の解放を主張することは決してありませんでした。彼女は、人形の中で最も素晴らしく、最も驚くべき存在であることで満足していました。ヴェルメイユ、あなたを祝福します——あなたの謙虚さは、価値のない人ほど多くを求めたがるのだということを証明しました。あなたの勝利を喜んでください、喜んでください、親愛なるお人形さん…<sup>21</sup>

ヴェルメイユは公に向けて執筆を行なうが、当時の社会において執筆活動に取り組む女性に対する蔑称であった「もの書き女(femme de lettres)」をもじった「ものを書く人形(poupée de lettres)」ではないし、「ブルーストッキング(bas-bleu)」を履くことも否定する。ヴェルメイユは決して「人形の解放(l'émancipation de la poupée)」という、行き過ぎた主張をすることはしない。

女性を表象するヴェルメイユの担う役割はあくまでも、当時のブルジョワ女性に許容される範囲のうちに限定されている。しかしながらここで重視すべきなのは、ヴェルメイユの思想は安全なものであると配慮されながらも、人形に過ぎないはずのヴェルメイユが歴史的な著名人と同一のレベルで扱われていることではないか。ヴェルメイユは回想録の著者としての類い稀な資質を有しており、その

著書は古典に並ぶほどの大きな影響力を有するのだとされる。このように主張するためにはヴェルメイユがブルジョワ社会の脅威になる人物たちとは異なるのだと釈明される必要があったが、その釈明においてむしろ、ヴェルメイユがかれらに比肩し得る存在であることが強調されているように思われる。

序文の筆者によって高く評価されたヴェルメイユの教育者としての資質と彼女の回想録の価値は、本作品の半ばにおいて彼女自身が自覚するところとなる。この回想録は本来、ヴェルメイユが人々の寝静まった夜中に月の光で手元を照らしながら人間に認識されることなく書き残してきた記録であったが、あるきっかけによりこの回想録が人間の社会で公刊されることとなり、ヴェルメイユ自身ものちにその事実を知って驚愕する<sup>22</sup>。ヴェルメイユは自分の私的な文章を公に晒されたことに大いに困惑するものの、回想録に付された先述の序文の存在がその後の彼女の執筆に対する意識を変えることになる。

人形の印象を集め、その思想をより偉大な思想によって引き立たせてくださった心の広い方はどなたでしょうか？ ああ、人形の理解者であるあなた、すべての人形の敬意と感謝を受け取ってください！ おそらくはとても偉大な人々——わたしは知りませんでした——の名前のなかにヴェルメイユの名が並べられているのを見て、うぬぼれた喜びをあなたに隠そうとは思いません！<sup>23</sup>

序文の筆者によって自身の名前が偉大な人々の名に連ねられ、自分の思想が際立たせられたことにヴェルメイユは喜びをあらわにする。そして彼女は教育者としての役割を自覚するようになり、みずからの意志によって続きを執筆することの決意を固めるのである。実際にこの場面以降、回想録には読者の存在を意識し語りかけるような口調がしばしば見られるようになり、ヴェルメイユは自分の説教くさを弁解しながらも、読者にとって有益な存在としてその成長に寄与したいと述べている<sup>24</sup>。

この回想録の執筆は、終盤の持ち主であった少女の不幸による家の火災で、ヴェルメイユが焼失することによって終わりを迎えるが、後日に焼け跡から発見され新聞記事に掲載されたという設定のヴェルメイユの遺言には、みずからの使命を自覚したうえで彼女の強い意志が表明されている。

しかしヴェルメイユの証言は愛の証言であり、自分の心のうちにあるすべての優しさを子どもたちに与える母の証言です。

22 *Ibid.*, p. 110. 本作品の前半部は、所有者の少女とともに船で海外に向かっていたヴェルメイユが嵐による難破のために海へ投げ出される場面で終了し、続編にあたる後半部(註16参照)はヴェルメイユがグアドループの岸辺に打ち上げられたところから開始される。この回想録が公になるのは、あとに残された回想録をヴェルメイユの所有者であった少女が拾い、出版したことによる。ヴェルメイユは漂着したグアドループで、別の新たな持ち主の少女によって読み聞かされる本が自分の執筆していた回想録であることに気づくこととなる。

23 *Ibid.*, p. 110.

24 *Ibid.*, p. 102.

25 *Ibid.*, p. 179.

26 象徴としての母というモチーフは、当時「家庭の天使」として女性のモデルとされた聖母マリアを連想させる。また、序文において筆者は、本作品の中盤で嵐によって海の中に呑み込まれたヴェルメイユを、古代ローマの建国神話に登場するロムルスや、ベルナルダン・ド・サン＝ピエール (Bernardin de Saint-Pierre) 『ポールとヴィルジニー (Paul et Virginie)』(1788)のヒロイン、ヴィルジニーに喩えており、これらの記述からもヴェルメイユに対して何らかの象徴性を担わせようとする意図を想定できる。*Ibid.*, p. 6.

27 たとえば、以下など。Guerrier de Haupt, *op. cit.* Zénaïde Fleuriot, *Bouche en coeur*. 2<sup>e</sup> éd. Paris, Hachette, 1887. Gabriel Franay, *Les mémoires de Primevère*. Paris, A. Colin, 1898.

28 Mme de Villeblanche, *Souvenirs de Charmante*. Paris, J. Vermot et C<sup>ie</sup>, 1865.

わたしはそうすることもできたでしょうが、だれか若い人形を後継者として選ぶことはしませんでした。わたしの富がどうなるかなどわたしにとってほとんど問題ではないのです。わたしはこの先のすべての世代の少女たちを後継者にしたいと思っています。わたしの贈り物は、東から西、北から南までに及びます。少女のいるあらゆるところで、彼女たちはわたしが残す遺産を受ける権利があります。<sup>25</sup>

遺言を残したヴェルメイユみずからが、自身の言葉を「母の証言」と呼称している点に着目したい。ここでの母とは当然ながら、現実において物理的に子どもを産み育てる生物学上の母ではなく、あくまで象徴的な意味での〈母〉である<sup>26</sup>。〈母〉となった人形ヴェルメイユは、未来のすべての少女を彼女の後継者、すなわち〈娘〉として、その遺産を受け継ぐよう明言するのである。

現実の世界において女性たちと密接な関係にあるモノとしての人形が、フィクションの世界において執筆する能力を授かったとき、その人形は人間の女性たちにとっての想像上の〈母〉として立ちあらわれた。威厳をもって広範にわたる影響力を行使するにまで至ったヴェルメイユは、しかし序文の筆者が強調していたように、あくまでも謙虚で慎ましい人形であるにすぎず、決して当時の女性に許された領分を超え出ようとすることはない。ヴェルメイユが回想録で語る内容は道徳的な性質が色濃く、本作品において〈母〉としての人形ヴェルメイユは、読者の女性たちの成長を優しく見守る、よき教育者であるにとどまっていた。しかしながら一度みずからの思考と執筆する能力を与えられ、さらに人間を教育する側としての優れた資質を獲得した人形のモチーフは、後続の女性作家たちによって、その役割を大きく広げていくこととなった。

## 2.2. ヴィルブランシュ夫人『シャルマンの思い出』(1865)

『人形の回想録』は幾度も版を重ねたロングセラーとなり、人形が感情や思考を有して人間社会を循環するという筋書きは、後続の児童文学作家たちによって受け継がれていった<sup>27</sup>。なかでもグローが呈示した人形の〈母〉としての役割が明確にあらわれている作品のひとつが、『人形の回想録』より四半世紀ほどの時を経て第二帝政期に刊行された、ヴィルブランシュ夫人による『シャルマンの思い出 (Souvenirs de Charmante)』(1865)である<sup>28</sup>。本書の構造やプロットは『人形の回想録』と類似しており、玩具店で販売されていた高貴な人形シャルマンが複数の持ち主のもとを転々とする記録が語られるが、『人形の回想録』との最大の違いのひとつは、人形



であるシャルマントが自身の教育者としての役割について、冒頭から自覚的だという点にある。

先述のように『人形の回想録』は、人形が秘密裡に書き溜めていた文章がのちに人間によって発見され、他者による序文を付されて出版されるという体裁を取っていた。これに対して本作品では、シャルマント自身が出版を目的として自身の過去を振り返りながらその半生を語る。その際に彼女が強調するのは、長い年月をかけて蓄積してきた人形としての自身の様々な経験である。シャルマントはみずからが執筆した本作品の序文において、読者の母親に対し、次のように語る。

ご婦人のみなさん、ご覧の通り、挿絵ではわたしはとても若く見えるでしょうけど、実は非常に年老いていて、それゆえとても経験豊かなのです。わたしは社会的地位のあらゆる段階を経てきました。高貴な女性の地位から、あえて言いましょうか？…郊外の野次馬たちを楽しませる曲芸師まで。ええマダムたち、すぐれた貴族の人形であるわたしは、大道芸の小屋にいたことがあるのです。そしてさらには、一晚中、くず物商の背負いかごの中で漂っていたこともあるのです。それが運命の打撃です！

あなたがたはお尋ねになるでしょう。そうした境遇を経た後に、どのようにしてわたしが良い状態になり、ものを書く人形になったのかと。それが、この小さな本があなたがたにお話しする物語のすべてなのです。

マダムたち、この告白によってあなたがたには、わたしが虚栄心から自分の回想を出版するのではないということをおわかりいただけるでしょう。いいえ、わたしの目的は、もっとずっと高尚なものです！<sup>29</sup>

ここでシャルマントが『人形の回想録』の序文の著者によっては否定されていた「ものを書く人形」とみずから名乗っている点に着目したい。シャルマントはさらに、次のように続ける。

わたしは仲間の人形たちの運命を生まれ変わらせることによって、その主人である少女たちの心をよりよいものにし、成長させたいのです。その儚い命運が、子どもの気まぐれに左右されるこの慎ましい生き物にとっては特に、それはとても野心的な、非常に大胆な計画だとおっしゃるでしょうか？ でも、だからどうだというのでしょうか？ 小さなことが大きな効果をもたらすのです！ 出版は自由であり、いかなる法も、人形が哲学者や教授になることを禁じてはいません。

29 *Ibid.*, pp. VIII- IX. 下線引用者。

30 *Ibid.*, pp. IX-X.

31 Zénaïde Fleuriotの *Bouche en coeur* (1882)の語り手の人形もまた「知性 (intelligence)」に関心を有し、自分に優れた知性が与えられたことを誇りに思い、男性陣がかわず政治や歴史、天文学に関する会話に憧れたり、議会の討論を見学したり、哲学書を読もうと努めている。Fleuriot, *op. cit.*

32 次の作品にはそのような教育的意図が明確にあらわれている。Marie Guerrier de Haupt, *Histoires de sept poupées racontées par elles-mêmes*. 当時の児童文学作品における上層階級の娘が貧しい少女に人形を譲る慈善行為、商品価値の異なる人形とその所有者の階級の対応関係などに着目した Sarah Mazaは、次の論考で人形と階級や労働をめぐる問題について考察を行なっている。Sarah Maza, « Toy stories : poupées, culture matérielle et imaginaire de classe dans la France du XIXe siècle », *Revue historique*, vol. 694, n° 2, 2020, pp. 135-167.

33 イヴォヌ・クニピレール、カトリーヌ・フーケ『母親の社会史——中世から現代まで』中嶋公子ほか訳、筑摩書房、1994年。

わたしは社会を遍歴するなかで、大いに観察し、大いに苦しみ、大いに考えました。ですから、多くの人々が悪いことをしようとするなかで、どうして、少しばかり善をなそうと努めないことがあるのでしょうか？<sup>30</sup>

「ものを書く人形」となったシャルマントは、当時の女性には困難であった出版の自由を主張し、男性のうちでも特に知的階層にしか開かれていなかった哲学者や教授になることにまで言及する<sup>31</sup>。本作品におけるシャルマントは『人形の回想録』において提起された教育者としての〈母〉の地位を継承しつつ、そこで彼女は明らかに、当時の社会のブルジョワ女性の領分を逸脱するようなかたちでその役割を拡張させている。

このことはシャルマント自身が執筆し共有する彼女の経験それ自体についても当てはまる。主として上層階級の少女たちのもとにあった『人形の回想録』のヴェルメイユと比べ、〈母〉たるシャルマントの経験は、ブルジョワ家庭の少女たちがとどまるべきとされた領域を超え出ている。先述の引用部にあるように、豪華な人形として玩具店で販売されていたシャルマントは最初に購入された裕福な家庭での贅沢な生活から外れ、農民の娘のもとで牛の世話を手伝ったことも、人形劇団の一味に盗まれて女優として活躍したことも、没落して一晩中くず物商の背負いかごの中に入ったこともあった。本書の目的のひとつは、シャルマントの語りを通じて、私的空間にあることを求められた上層階級の少女たちに対し、彼女たちが決して現実には知り得ない他の階級や職業の人々の世界を擬似的に体験させることにあっただろう<sup>32</sup>。

高貴な女性を体現するシャルマントは、同時に商品として作られたモノとして、人間の社会を循環し、現実の上層階級の女性には縁遠かった領域にも踏み入ることができる。そして自身の苦労や経験、思想を、出版によって世に広め、他の人形たちにも自身の意志を共有し、各々の持ち主である少女に影響を与えることを願うのである。

本章では『人形の回想録』と『シャルマントの思い出』の二作品における「ものを書く人形」というモチーフに、女性たちを教育する想像上の〈母〉としての役割を見出してきたが、ここで19世紀フランスの上層階級の少女教育において、血縁上の母親という身分に極めて重い価値が置かれていたことを想起しておきたい<sup>33</sup>。娘を産んだ母親はみずからがモデルとなり、娘を理想的な女性に教育し、結婚させる責務を負う。娘は母親に倣って女性に相応しい資質や美德、家政の実践的知識を習得し、将来においてみずからも子を産んで母となり、新たに子を育てる役目を負う。

第1章で見てきたように、当時の社会の主流の見解において人形

に期待されていたのは、血縁上の母・娘関係によって継続する生殖のサイクルを円滑に促すべく、娘たちにブルジョワ女性の規範を教育する道具となることであった。この点を踏まえるならば、人形が〈母〉としての威厳を与えられ、ヴェルメイユのように歴史上の偉大な人物たちと同列に並べられ、シャルマントのように少女たちを人間社会のあちこちへと導くことで、規範への反撥を促すかのような性格が与えられていることは特筆すべきだろう。人形は現実において少女たちの遊びの客体でありながらも、フィクションの世界では彼女たちを見守り導く教育の主体となるのであり、その時々に応じて自身の役割、所有者である女性との関係性を変転させていく。次章では、『シャルマントの思い出』の著者であったヴィルブランシュ夫人自身が編集長を務めた少女雑誌において、〈母〉としての「ものを書く人形」のモチーフが現実とフィクションの交錯、人間と人形の互換可能性を活用するかたちで展開されていくさまを考察していきたい。

### 3. 少女雑誌『ラ・プペ・モデル』を通じた〈母〉-〈娘〉関係の広がり

#### 3.1. 人形同士の〈母〉-〈娘〉関係

『シャルマントの思い出』は、上層階級の6-12歳頃の少女を対象として創刊され、高い人気を誇った雑誌『模範的な人形——少女の雑誌 (*La poupée modèle : journal des petites filles*)』(1863-1924) (以下、『ラ・プペ・モデル』と表記)の創刊号より連載された物語であり<sup>34</sup>、著者ヴィルブランシュ夫人はこの雑誌の初期に、中心的に編集に携わった人物であった<sup>35</sup>。

『ラ・プペ・モデル』は実在のモノとしての人形、また児童文学におけるモチーフとしての人形という、互いに影響を与え合っていた両者が交差する領域に位置している雑誌である<sup>36</sup>。刊行期間は1863年から1924年までに及び、フランス国内のみならずヨーロッパの近隣諸国やロシア、エジプト、フランス領インドなど諸外国やフランスの植民地でも購読可能であった。毎号、連載形式の長編や読み切りの短編などの物語、道徳に関するコラム、料理やお菓子のレシピ、裁縫の方法、クイズのほか、人形サイズの洋服の型紙やカラーのファッション・プレート、楽譜などが付録となっていた【図3】。

この雑誌の特徴のひとつとして、特に創刊から数年の期間において、複数の定番となるキャラクターが登場し、毎号を通じて架空の人形たちの世界が展開されていたことが挙げられる<sup>37</sup>。このうち *Vieille Poupée* と称される女性の人形は、まず、老いた／古い (*vieille*) と

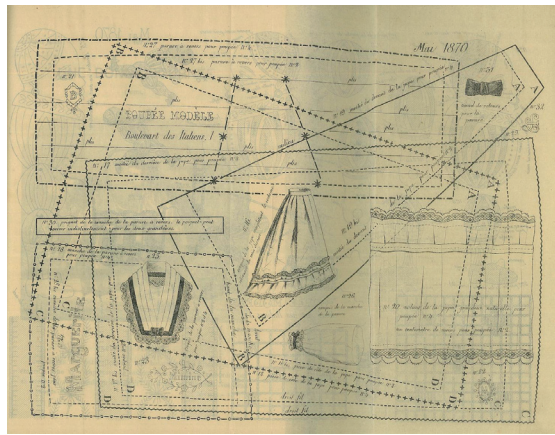
34 1863年には、『ラ・プペ・モデル』のほかに「人形 (*poupée*)」という単語をタイトルに含む *La Poupée* (1863-1864)、*Gazette de la poupée* (1863-1867) が創刊された。

35 本論文執筆時において、彼女の詳細な経歴は明らかになっていない。以下の文献には、1835年に *Blanche d'Andeville* として生まれ、後に結婚して *Mme Scuriot* という姓になったとある。Georges d'Heylli, *Dictionnaire des pseudonymes, Nouv. éd. entièrement refondue et augm.*, Paris, Dentu, 1887. この情報に基づけば、『ラ・プペ・モデル』創刊時、彼女は28歳である。

36 本雑誌のバックナンバーは1年単位の合本として販売されていた。本論文において対象とする刊行年の期間は、執筆時に入手可能であった、1863年11月(創刊号)～1868年10月、1869年11月～1870年10月、1878年12月～1879年11月、1880年12月～1881年11月、1891年12月～1893年11月である。以下、脚注の文献表記にあたって [*P.M.*, 雑誌の発行年, 合本の創刊からの年次, 合本のページ数] と表記する (例: *P.M.*, novembre, 1863, 1<sup>ère</sup> année, pp.2-4.)。

37 1880年代初頭の号には *Jules Thiéry* という人物が雑誌の責任者として記されているが、この頃には人形のキャラクターとしての登場頻度は創刊期と比べて減少しており、キャラクターを活用した誌面の制作にはヴィルブランシュ夫人の意向が大きく関与していたことが推測される。

38 創刊号の1863年11月の冒頭の「古人形の助言」で語られる内容は、『シャルマンの思い出』の先述の序文と多くの文言が重複しており、古人形とシャルマンの役割の共通性が明らかである。P.M., novembre, 1863, 1<sup>ère</sup> année, p. 2. Mme de Villeblanche, *op. cit.*, pp. XVIII-XIX. なお、『シャルマンの思い出』の序文は、連載終了後、単行本化された際に追加されたものである。



【図3】『ラ・プペ・モデル』1870年5月号 付録の人形用の服の型紙

いう名前の通り長年の経験を積んでいるという点、次に人形 (poupée) であるがゆえに少女たちを楽しませながら学びを与えることができるという点で、前章で扱ったシャルマンと共通する〈母〉としての役割を与えられている (以下、Vieille Poupéeは「古人形」と表記する)<sup>38</sup>。古人形は『ラ・プペ・モデル』の統括者のような立場にあり、一部のコーナーの末尾には彼女の名が記されているほか、「古人形の助言 (Conseils d'une Vieille Poupée)」というコーナーでは、「両親をどのように愛するべきか」「慈善について」など、少女たちが大切にすべき道徳や家事の実践について語りかける。

『ラ・プペ・モデル』における〈母〉としての人形をめぐる、前章で扱った『人形の回想録』と『シャルマンの思い出』とは異なる点として、後者二作品において〈母〉たる人形の教育の対象として想定されていたのは作品の外に属する現実の読者であったのに対し、『ラ・プペ・モデル』では〈母〉たる古人形に対して、その教えを受け世話をされる対象となる、いわば〈娘〉に相当する少女の人形たちが雑誌に登場し、両者の関係が描かれることが挙げられる。その中心的位置を占めるのがシフォネット (Chiffonnette) というキャラクターであり、古人形との関係は、主にパリに住むシフォネットが地方に住むリリー (Lily) という人形に宛てた書簡形式の「おしゃべり (Causerie)」というコーナーにおいて描かれている。ここで語られるエピソードの大半はシフォネットの失敗談であり、シフォネットが自身のコケットリーや虚栄心から古人形の忠告に従わなかったことによって失敗を犯し反省するという一連の流れがパターン化されている。いずれの回においても古人形は常にシフォネットに対して厳しくも愛情深く接し、シフォネットが同じ失敗を繰り返しても、

温かく辛抱強く彼女を見守り続ける。これに対してシフォネットは古人形の献身的な姿に深く感謝し、いかなる場面においても彼女の助言に必ず従うことを心に誓い、古人形に絶対的な信頼を置いていることが読み取れる。雑誌上で成立した人形同士の〈母〉-〈娘〉関係は、厳格な上下関係にありながらも深く親密な関係で結ばれているのである。

古人形とシフォネットがいかにしてこのような関係を結ぶに至ったか、その背景は『ラ・プペ・モデル』の創刊から約2年後、雑誌のスピンオフ的な位置づけで刊行されたヴィルブランシュ夫人作『シフォネット、いつも良い子というわけではなかったある少女の物語 (*Chiffonnette, histoire d'une petite fille qui n'était pas sage tous les jours*)』(1865)において詳述される(以下、タイトルは『シフォネット』と表記)<sup>39</sup>。以下では本作品の検討を通じて、両キャラクターの設定の背景となるエピソードを辿りながら、ヴィルブランシュ夫人が描いた古人形とシフォネットの〈母〉-〈娘〉関係の内実に迫っていきたい。

39 Mme de Villeblanche, *Chiffonnette, histoire d'une petite fille qui n'était pas sage tous les jours*. Paris, J. Vermot et C<sup>ie</sup>, 1865.

40 *Ibid.*, p.1.

### 3.2. 人間同士の〈母〉-〈娘〉関係

『シフォネット』では、主人公のシフォネットの生い立ちから『ラ・プペ・モデル』に寄稿するようになるまでの過程がシフォネット自身の一人称の語りによって綴られるが、作品の冒頭で、シフォネットはまず読者に対して重大な事実を明かす。『ラ・プペ・モデル』に登場する人形シフォネットは、実は人形ではなく、人間の少女であったと告白するのである。物語はシフォネットやその他の登場人物が人間であることを前提に進行することとなる<sup>40</sup>。

シフォネットはフランス人の両親のもと、父親の仕事の都合で移住していたブラジルのリオデジャネイロで生まれた。シフォネットは両親から甘やかされて育ち、「世界で最も幸せな少女」であったが、ある日、父親が仕事のために未開の地へと単身で探索に向かうと、残されたシフォネットの母親は夫の身を案じて体調を崩し、まもなく衰弱して亡くなってしまふ。孤児となったシフォネットは、黒人の女中とともに英国人の一家に引き取られたのち、その家を追い出されてプランテーションで暮らすこととなったが、やがてパリに住むシフォネットの母親の友人という女性に引き取られることが決まる。船旅を経て到着したフランスでは連絡の行き違いによりその女性が旅に出てしまっていたために、船中で親しくなった水夫の実家の農家に預けられてしばらく過ごす、最終的にこの母の友人である女性のもとへ迎え入れられる。シフォネットは彼女と対面するとたちまち気に入る、Bonne Amie(「良き友人」の意味であるが、本作品では愛称として固有名詞のように用いられていることから、以下「ボナミ」と表記する)と呼ぶようになった。ボナミは、シフォネッ

41 *Ibid.*, p. 106.

42 その両義性が明白に示されているのが、シフォネットや子どもたちの遊び道具としての「人形」に関するエピソードである。本作品には主に、本作で描かれるパリのブルジョワ社会とその外部という対立を象徴するかのような、当時の玩具としての複数の白い人形と、ブラジルでの女中であった黒人の母娘が手作りし、二人の名前をとってジジ=コーラと名づけられたクレオールの人形という二種類の人形が登場する。物語の後半、パリでボナミと暮らし始めたシフォネットが双方の人形と向き合う場面では、友達の少女たちの所有物である美しいとされる白い人形に対する羨望と、醜く感じられるが孤独な頃の自分の味方だったクレオールの人形ジジ=コーラを大切にしたい気持ちとの間で大きく揺れ動くが、そのシフォネットの躊躇いを左右するのが、密かにボナミが声を吹き込んでいたベットのオウムによる助言であった。オウムはシフォネットが白い人形を優先してクレオールの人形を虐げることがを諫めながらも、他方でジジ=コーラのために白い人形を諦めて父親に返そうとする決断に対してはそれを思い止まらせ、両者をそれぞれ平等に大切にすべきだと伝える。ボナミ=古人形は少なくとも建前上は、シフォネットをブルジョワ社会に適応するよう教育する責任を負うが、その反面、彼女の過去の周縁の世界での記憶を保持し続け、尊重するよう暗に促しているのでもある。ただし、安全な空間への回帰を約束されていないながら、「周縁」の世界での経験を価値あるものとして取り込むこと自体、当時の少年向けの冒険物語にも見られたような帝国主義的エキゾチズムを孕んでいることに留意する必要がある。*Ibid.*, pp. 117-136.

43 *Ibid.*, p. 5.

44 *Ibid.*, p. 88.

トが無知でコケット、粗野であることを知ると、彼女の服をパリ風に着替えさせ、読み書きを教え、同年代の少女たちと交流させる。終盤では行方不明になっていた父親があらわれ、父はシフォネットを養うべく再びフランスで仕事を始め、シフォネットはボナミのもとで世話を受け続けるとされ、物語は締め括られる。

シフォネットの母親の友人であるボナミという女性が、『ラ・プベ・モデル』の古人形に対応する人物である。『シフォネット』において *Vieille Poupée* (古人形) という呼称は一切用いられないことがないが、*Bonne Amie* は『ラ・プベ・モデル』において、シフォネットが古人形に話しかけたり言及したりするときの呼び方のひとつであった。

〈母〉であるボナミ=古人形は、母を亡くした少女シフォネットを養育する文字通り彼女の代理の母であったことが明らかとなったが、上層階級の少女を対象とした本書において彼女がプロット上負っている役割とは、外の世界で異なる人種や階層の人々と交流を持ち様々な体験を経てきたシフォネットを、最終的にブルジョワ社会の秩序に馴致させることであっただろう。実際にボナミはシフォネットに対し、「あなたをここに連れてきた無知で粗野な農家の女性」よりも、「とても賢くて、才気に溢れた、あなたのかわいそうなお母様」のようになるべく「教育と勉強」が必要であるのだと、あからさまな表現で述べている<sup>41</sup>。しかしながら、本作品の結末に見られるようにボナミの教育の目的は両義的なものであり<sup>42</sup>、とりわけ生殖をめぐるのは、ブルジョワ女性に課された規範——女は結婚して妻となり、子どもを産み育てる母となるべき——に反するような在り方が顕著にあらわれている。

まず、本書においてシフォネットの実の母親の存在感は、代理の母ボナミと比べて希薄である。シフォネットの実の母親は「ブロンドで、ほっそりしていて、すべての振る舞いが優雅で、とても感じがよく、明るく、善良な」、「ママの宝<sup>43</sup>」のようでありながら、夫の不在によるショックで心身ともに衰弱し命を落としてしまう。これに対し〈母〉であるボナミはシフォネットの実の母親とそっくりな外見であるとされながら、シフォネットを甘やかすばかりであった彼女とは対照的に、シフォネットに愛情深くも厳しく接する、よき教育者として描かれる。シフォネットとボナミは出逢ってすぐに惹かれ合い、ボナミは彼女の〈娘〉として迎え入れたシフォネットに対し「わたしはあなたの本当の母親になりたい」と述べ、シフォネットもまた「自分の母親に再会したのかと思っ<sup>44</sup>」たとボナミを気に入る、たちまち彼女に愛着を抱くようになる。血縁関係にないボナミとシフォネットは互いに尊重し合い、〈母〉と〈娘〉の強い結びつきを形成していくのである。

さらに、シフォネットがボナミに対して感謝の念とともに次のよ

うな思いを述べていることに着目したい。

ボナミがわたしのために——わたしは彼女の親戚でさえいないのに——してくれたことを思って、ひとりごとを言いました。「それはとてもすばらしいことだわ！ 裕福でないといけない…彼女はお金があるけれど、わたしにはない。彼女はわたしを世話して、服を着せて、かわいがってくれる…すばらしいことだわ！ わたしが大人になって、お金持ちになったら、彼女のようにしよう、わたしが大好きな、わたしより先に死んでしまうお友達の娘たちを養子にしよう！」<sup>45</sup>

本書の目的がシフォネットをブルジョワ社会に馴致させることであるならば、彼女は実の母親のように結婚して子どもを産み育てるよう促されねばならないはずである。しかしシフォネットは自分と血縁関係にないボナミが母親のように自分を養育してくれたことに感謝し、のみならず将来、ボナミが行なったように自分も裕福になり、亡くなった友人の娘たちを養子にしたいという考えを抱く。そして実際に、シフォネットはボナミから依頼されて『ラ・プペ・モデル』の寄稿者として一コーナーを受け持ち、執筆によって読者の少女たちの役に立とうと努めるようになるのである<sup>46</sup>。〈娘〉であるシフォネットが〈母〉であるボナミをモデルとしながら、みずから〈母〉と同様の役割を主体的に担うこととなり、ボナミのもとで新たな〈母〉として育っていく兆しが見られる<sup>47</sup>。

竹村和子が指摘するように、孤児物語における代理の母という役割はそれ自体、血縁上の母-娘関係に絶対的な価値を置く母性イデオロギーの虚構性を暴き出す性質を有していた<sup>48</sup>。古人形が担っていた〈母〉としての人形の役割が『シフォネット』の物語世界において人間の女性として再構成されたとき、彼女はブルジョワ家庭の母親に求められる従順さや客体性とは対照的な性質を備える女性として登場することとなり、彼女の〈娘〉になった少女はその〈母〉から教えを受けながら彼女に倣い、成長していく。フィクションの世界において人間同士が結んだ親密な〈母〉-〈娘〉関係は、単に血縁上の母-娘関係における欠如を補う代理物ではなく、当時の家庭と社会の秩序の基盤となる母-娘関係の垂直的な構造にズレを生じさせ、攪乱する可能性を秘めた関係として構築されるのである。

45 *Ibid.*, pp. 107-108.

46 *Ibid.*, p. 155.

47 なお、この関係性は、『シャルマントの思い出』におけるシャルマントという人形を媒介して考えることもできる。あくまでモノという物理的条件によって動きを制限されていた人形シャルマントと異なり、人間の少女として設定されたシフォネットはみずから行動する自由を得るが、上層階級からはずれて社会をめぐるという点で両者の物語内での役割は共通しており、シフォネットは人形シャルマントを人間の少女に置き換えたものと捉えることが可能だろう。しかし他方、先述したようにみずからの経験を読者に共有し教えるを与える役目を担っていたシャルマントは、『ラ・プペ・モデル』の古人形、つまり『シフォネット』におけるボナミと同様の役割を担っている。シャルマントという人形は、〈娘〉としてのシフォネットでも〈母〉たる古人形=ボナミでもあるのであり、この点からも、シフォネットが〈娘〉から〈母〉へと移行する潜在的な可能性を秘めているといえる。

48 竹村和子は19世紀のアメリカの児童文学に頻出した孤児のモチーフに関する論考において、母親の喪失や不在により孤児となった少女を教育するために要請される代理母は、生物学上の母親でないという事実によって「ジェンダーの本質性という性別イデオロギーを崩し、その社会構築性をも皮肉にも浮き彫りにする」のだと述べている。竹村によれば、代理母とその養女の「非血縁的な女同士の保護関係は、それが愛と共感に満ちたものであるとき、皮肉なことに、当時稼働しはじめていた家族神話をあらかじめ空洞化させる攪乱性を胚胎する」。竹村和子「母なき娘はヒロインになるか——孤児物語のポストファミリー」『文学力の挑戦——ファミリー・欲望・テロリズム』研究社、2012年、3-44頁。

49 1865年11月号の『ラ・プペ・モデル』の記事で本作品『シフォネット』が紹介される際、シフォネットはこの作品の存在を初めて知って困惑し、まったく身に覚えがないと述べており、両者がそれぞれ異なるフィクションの世界であることが示されている。P.M., novembre, 1865, 3<sup>ème</sup> année.

50 『ラ・プペ・モデル』の人形の世界では、古人形がシフォネットの友人たちである他の複数の少女のキャラクターの面倒を見る様子が描かれている。

51 P.M., juin, 1868, 5<sup>ème</sup> année. また先述のように『ラ・プペ・モデル』はフランス国外でも予約購読することができ、「教えと助言」のコーナーにはロシアの衣裳の型紙を編集部へ送ったとみられる少女に感謝するメッセージが掲載されるなど、雑誌の及ぼす影響は地理的にも広範に及んでいたと推察される。P.M., juin, 1868, 5<sup>ème</sup> année.

### 3.3. 人間と人形の互換可能性、フィクションと現実の交錯

ここから再び、雑誌『ラ・プペ・モデル』に戻りたい。スピノフの作品『シフォネット』において〈母〉-〈娘〉関係を結んだ経緯が明らかにされたボナミとシフォネットは、『ラ・プペ・モデル』においては人間ではなく、それぞれ人形として登場していた<sup>49</sup>。ヴィルブランシュ夫人はこれらのキャラクターが人間と人形のどちらも捉え得るよう設定したと想定されるが、『ラ・プペ・モデル』では人形と人間の外見的な類似による両者の互換性が前提とされながら、定期刊行物という刊行形態の利点を活かし、現実とフィクションを横断するかたちで〈母〉-〈娘〉関係が次々と結ばれてゆくことになる。以下では、これまでの〈母〉-〈娘〉関係についての整理をもとに、『ラ・プペ・モデル』に施された仕掛けを活用したその展開方法を見ていきたい。

まず、古人形は『ラ・プペ・モデル』において、『人形の回想録』のヴェルメイユや『シャルマンの思い出』のシャルマンと同様に、読者である少女たちに語りかけ助言を与えていた。血縁関係を要さない〈母〉-〈娘〉関係において、ボナミ＝古人形は理論上、どの少女にとっての——おそらくあくまでも階級や人種といった性質を同じくするという条件つきではあるが——〈母〉にもなり得る存在であり<sup>50</sup>、現実の読者の少女たちもまた、シフォネットと同様に、古人形の〈娘〉として想定されていたことが読み取れる。

シフォネットが古人形から指導を受けるのみならず、みずから古人形に対して積極的に関わっていたように、古人形と読者の少女たちの関係においてもまた、そのはたらきかけは〈母〉から〈娘〉へという一方向的なものではなかった。たとえば、各号の「教えと助言 (Renseignements et Conseils)」のコーナーは、読者から『ラ・プペ・モデル』の編集部宛に届いた投書に対する古人形やシフォネットからの返答という体裁をとっており、読者がフィクションの世界の人形と交流し、人形の世界へと没入することができるかのような効果が生まれている。古人形は、シフォネットに対して語りかけるのと同様の調子で、送り主の少女に欠点を直すよう促し、良い少女になるよう激励したり、厳しい言葉で読者を叱責したりする。

なお、これらのなかには「年をとりすぎてしまった読者」や既婚女性の敬称「Mme」など、年長の女性や読者の母親と推測できる人物へのメッセージが掲載されている。自分の子を亡くしたとみられる母親を慰め、彼女とともに子どもの死を悼んだことによって「わたしたちは本当の友になった」のだと励ますものや、雑誌に寄せられた批判に対し毅然として反論するような文章からは、〈母〉としての古人形の助言が少女のみならず大人の女性たちにも向けられていたことがわかる<sup>51</sup>。シフォネットが古人形に愛着を抱いていたよ



うに、読者の女性たちにとっても〈母〉たる古人形は敬慕と信頼の対象となっていたのだ。同時に、シフォネットもまた読者たちから愛される存在であったと想定され、シフォネットは1864年10月号において、読者から古人形に宛てられたメッセージの多くに「シフォネットはお元気ですか?」「わたしはシフォネットが大好きです」「シフォネットはどうやって聞き分けの良い子になるのですか?」「わたしはシフォネットに起きたことを自分の人形にお話ししています、同じようなことをしないように」といった内容が添えられていることに関して喜びを表明している<sup>52</sup>。

そして、〈娘〉が雑誌上のシフォネットであると同時に現実の読者でもあったのに対して、フィクションにおけるボナミ＝古人形たる〈母〉の存在が現実の人間と具体的に結びつけられるとき、人形を介した〈母〉-〈娘〉関係のネットワークの全貌が明らかになる。『ラ・プペ・モデル』において〈母〉たる古人形＝ボナミの素性は詳述されることがなく、「教えと助言」のコーナーにおいて古人形が何者かを探ろうとする読者の質問に対しても、古人形は特定の個人と結びつけられると少女たちが落胆することになると懸念すると述べ、決して自身について語ろうとはしなかった<sup>53</sup>。

しかし、雑誌の創刊から約10年後、初めて彼女の正体が読者に向けて明かされる。1873年に刊行された、『ラ・プペ・モデル』掲載の物語を数編収録した『ある古人形の物語集——ヴィルブランシュ夫人編 (Contes d'une vieille poupée, recueillis par Mme de Villeblanche)』(1873)の「この本を読む子どもたちへの編集者のノート (note de l'éditeur aux enfants qui liront ce volume)」と題された前書きにおいて、古人形と呼ばれる存在が、実は人形ではなく人間であること、そしてそれは『ラ・プペ・モデル』の編集長ヴィルブランシュ夫人であるという事実が述べられるのである。

この世界に、ある古い人形がいます。この人形は少女たちをととてもとても愛しており、彼女たちに物語をお話しすること、軽快な楽しみとやさしいお仕事を彼女たちのためにつくりだすこと、ひとことでいえば、彼女たちにできるかぎり、完璧で、幸せな少女になってもらうことに、彼女の人生と経験を捧げています——人は何かに専念できているとき、そして自分の義務をしっかりと果たすとき、常に幸せなのですから!

みなさんに告白しなくてはなりません、この古人形は、実は他の人形たちのような人形ではありません。それは生きているお人形、というより、人間であって人形ではないのです! 彼女の名前、すなわち彼女が幼い子らのため、とても役立つ楽しいお話を執筆するときの筆名は、ヴィルブランシュ夫人です。

52 P.M., octobre, 1864, 1<sup>ère</sup> année, p.282

53 P.M., juin, 1868, 5<sup>ème</sup> année.

54 Mme de Villeblanche, *Contes d'une vieille poupée, recueillis par Mme de Villeblanche*, Paris, T. Lefèvre, 1873, pp. V-VI. 強調原文。

55 Laurence Chaffinも『シャルマンの思い出』に示される道徳の両義性に着目し、本稿の筆者と同様、人形という形象を作者の女性にとってのオルター・エゴと捉える視点を呈示している。Laurence Chaffin, « Le roman de poupée. Un genre didactique ou comment écrire sans en avoir l'air », dans Andrea Del Lungo, Brigitte Louichon (dir.), *La Littérature en bas-bleus, Tome II, Romancières en France de 1848 à 1870*. Paris, Classiques Garnier, 2013, pp. 185-195.

56 D'Heylli, *op. cit.*

57 村田、前掲書、17-23頁。

58 Susan Hinerは、『ラ・プペ・モデル』よりも年長の少女を対象とした姉妹誌 *Le Journal des demoiselles* (1833-1922) の1833-1853年の期間の編集長を務めていたJeanne-Justine Fouqueau de Pussyという人物に着目し、若くして離婚を経験した彼女が、雑誌において自分自身を編集長、18歳の若い娘として二様に自己演出し、母と娘という役を同時に担い、雑誌のコンテンツを通じてブルジョワ女性たちのヴァーチャルなコミュニティを築き上げていったと述べている。Susan Hiner, "Becoming (M)other: Reflectivity in *Le Journal des Demoiselles*," *Romance Studies*. vol. 31. 2013, pp. 84-100. ヴィルブランシュ夫人が姉妹雑誌の手法を踏襲した可能性もありえるだろう。

ヴィルブランシュ夫人はこの時代のすべての少女が知っている魅力的な子ども雑誌『ラ・プペ・モデル』の編集長であり、創刊者なのです。<sup>54</sup>

古人形がヴィルブランシュ夫人という実在の人間であったという事実は、ここで読者に対して秘密の打ち明けというかたちで告げられることとなる。あらためて関係を整理するならば、フィクションにおける人形である古人形、人間の女性ボナミ、現実における人間の女性ヴィルブランシュ夫人という三者が同一であることになり、古人形=ボナミが有していた〈母〉としての役割は、ヴィルブランシュ夫人自身が担うものでもあることが示された。ヴィルブランシュ夫人は〈母〉としての人形の役割を『シャルマンの思い出』におけるシャルマン、雑誌『ラ・プペ・モデル』、『シフォネット』における古人形=ボナミというキャラクターに与え、遂にはその役割を、現実に身体を有するみずからへと結びつけるに至る。そして自身が編集長を務めた定期刊行物において、分身である〈母〉としての古人形を通じて、〈母〉-〈娘〉のネットワークを現実に広く展開したのであった。

執筆に携わる女性が作品上で自身を仮託する対象として選択したのが、人形というモチーフであったことは興味深い<sup>55</sup>。当時の人形は美しく従順で客体的な女性の象徴であった一方、生命も知能もなく物理的に生殖が不可能であるというその本来の性質からして、女性が同一化すべき対象ではありえなかっただろう。また、*Vielle Poupée* (古/老人形)という言葉は、当時の社会において未婚のまま年齢を重ねた女性に対する蔑称であった *vielle fille* (老嬢) という言葉を想起させもする。ヴィルブランシュ夫人自身は既婚者であったと推定されるが<sup>56</sup>、女性に対する軽蔑的な意味も帯びる言葉であると同時に、執筆を行なう女性作家たちが時に社会の逸脱者とみなされしばしば老嬢と結びつけられていたことも踏まえるならば<sup>57</sup>、「老嬢」に対するネガティブな意味合いが女性たちに慕われ愛される「古人形」において、アイロニカルに覆されたものとも捉えられる<sup>58</sup>。

古人形=ボナミ=ヴィルブランシュ夫人は、一方では生殖の不可能な人形というモノであるがゆえに、他方では経済的に自立し出版業に携わる女性であるがゆえに、実際の社会において少女たちが倣うべき女性像とは程遠い性質を有していたといえる。しかしながらこの雑誌のタイトルに掲げられた、読者の少女たちが「モデル (*modèle*)」とすべき「人形 (*la poupée*)」とは、実は人形にみずからを仮託しつつ〈母〉として執筆と編集を行なっていた、彼女自身のことであったかもしれない。

### 3.4. 人形による逸脱への誘い

フィクションの世界において〈母〉としての役割を負う人形は、一方で現実の世界においては、物理的なモノとして読者の前に存在していた。すなわち、〈母〉としての古人形＝ボナミ＝ヴィルブランシュ夫人＝…という等式の最後の項に、現実におけるモノとしての人形たちが位置づけられることとなる。女性たちは目の前に実在するモノとしての人形に直接触れて接し、愛情を注ぎ世話をするが、物語や雑誌を通じて今度はその人形が〈母〉として、人間の少女たちを教育する側に回るのであり、人間が人形と接するなかで、両者の主客関係は絶えず転倒し続ける。

こうして出版物を通じて形成されていったモノとしての〈母〉の教えは、おそらく第1章で概観したような、当時一般的に人形という玩具に想定されていたほどに、安全で望ましいものではなかっただろう。『シャルマンの思い出』において人形劇団の女優として巡業した経験を持つシャルマンが自負していたように、ブルジョワ家庭の少女たちが所有していた人形は、少女たちの主たる居所であった家庭の室内空間にとどまらず、その外の社会について多くを知る存在であった。『ラ・プペ・モデル』においても、シフォネットをはじめとする少女のキャラクターたちは現実の大人と同じように、夜会を開いたり、劇場を訪れたり、パリの街の散歩を自由に楽しんだりしている。

さらに「おしゃべり」のコーナーにおいてシフォネットの手紙の宛先とされているリリーというキャラクターは、誌面上でその言動が描かれることはほとんどないものの、誌面の各所の記述から現実において読者の所有する物理的な人形として想定されていたこと<sup>59</sup>、またリリーという名の人形が提携関係にあったパリの人形店において販売され、その洋服などの付属品が販売されていたことが読み取れる<sup>60</sup>。リリーという存在は、誌面で展開される架空の世界と、読者の属する現実の世界との媒介者であると同時に、商品として消費社会へと接続してもいたのである。

実在する人形店の広告も兼ねていた『ラ・プペ・モデル』は、現実の社会で繁栄していたモノとしての人形の生産や流通と密接に関連していた。シフォネットは『ラ・プペ・モデル』の創刊号において、次のように語っている。

『ジュルナル・デ・ドゥモワゼル (*Journal des demoiselles*)』においてわたしたちの小さなご主人様のお姉さまたちが、ときどき親切にもわたしたちに残そうとしていたスペースは限られていて、十分じゃなかったの。これからわたしたちも、わたしたちの雑誌、わたしたちだけの雑誌をはじめのよ。人形と女の子の興

59 たとえば1867年7月号に掲載された「小さなお母様から見捨てられた、あるリリーのお手紙 (Lettre d'une Lily abandonnée par sa petite maman)」と題されたコラムなど。P.M., juillet, 1867, 4<sup>ème</sup> année, pp. 199-201.

60 提携関係にあった人形店 À la poupée de Nuremberg は、パリの Rue de Choiseul 21 番に、1864年から1884年まで開店していた。Florence Theriault, *A Fully Perfected Grace : The World of the French Fashion Doll 1850-1880*. Annapolis, Theriault's Gold Horse Pub, 1996. Theriault 夫妻の Web サイトには、リリーであるとされる人形の写真が掲載されている。https://www.theriaults.com/lily-lavalle-peronne [2021年6月10日アクセス]

61 *P.M.*, novembre, 1863, 1<sup>ère</sup> année, p. 11. 註58の通り、『ラ・プペ・モデル』は14-18歳頃の若い娘を対象とした雑誌 *Le Journal des demoiselles* の妹版として刊行された。

62 *P.M.*, novembre, 1863, 1<sup>ère</sup> année, p. 2.

63 たとえば以下。Armand Audiganne, *L'industrie contemporaine, ses caractères et ses progrès chez les différents peuples du monde*. Paris, Capelle, 1856, pp. 469-470.

味を引く、あらゆるものについて伝えるの。モードに子どもの演劇、新しいおもちゃ、わたしたちがわたしたちのためにつくる作品たち、そうしたあらゆるものについて、あなたにお話しするわ。そうよ！ それはわたしたちがこの素敵なパリの街のなかで、重要な人物になったということなの。考えてみて、パリには人形だけを売り物にしているお店が100はあるし、ウィンドウの一面に人形を並べている大きなおもちゃ屋もあるわ。でも、それだけじゃないわ…わたしたちの生地メーカー、わたしたちのような小さな子たちには向かない大きな服のデザイン画もあるわ。わたしたちの下着屋さん、お洋服のデザイナーさん、帽子屋さん、装飾屋さん…良いお家の人形に必要な贅沢品しか扱わないお店まであるのよ。ブラシ、石鹸、お化粧用のスポンジなどなど、身支度に必要不可欠な日用品から、ボグやドミノ遊び、写真アルバム、名刺などなど、役には立たないけれど、何より楽しいものたちまで。それから、家具ね！ ほら、可愛い！ 魅力的でしょう！<sup>61</sup>

『ラ・プペ・モデル』創刊の目的として、古人形は「新しい喜びをみなさんのためにつくりながら、みなさんに良い子で、礼儀正しく、愛らしい少女に、そして小さな理想的な主婦になることを教えること<sup>62</sup>」と述べており、「おしゃべり」のコーナーにおいて、シフォネットは着飾りたい欲求やコケットリーによって幾度も失敗を犯し、痛い目に遭う。にもかかわらず、反面でそれを惹起する要因ともなる少女たちが憧れを抱くような美しく華やかな品々は、『ラ・プペ・モデル』において積極的に取り入れられ視覚的イメージとしても魅力的に描かれ、読者の購買意欲を掻き立てる【図4】。『シャルマンの思い出』にも見られたように、ブルジョワ女性としての道徳や資質を少女に教育することを建前上では要請しながらも、同時にそ



【図4】『ラ・プペ・モデル』1870年頃の付録

れらからの逸脱を促す構図が見受けられる。

当時、市場に商品として流通していたモノとしての人形は、その化粧の派手さや衣裳の行き過ぎた華やかさ、値段の高価さを懸念されていた<sup>63</sup>。家庭における遊びの生活の中心にあるとされてきた人形は<sup>64</sup>、他方で万国博覧会というスペクタクルにおいて不特定多数の人々からの眼差しを浴び、ショーウィンドウのなかで姿を晒し、人間から購入されるのを待つオブジェでもあった<sup>65</sup>。モノとして社会を循環する人形たちは、現実において私的空間にとどまることを求められる少女たちに、未知の世界を教え、その欲望と憧憬を惹起し、さまざまな空想上の愉しみをもたらしていたのである。

## おわりに

玩具としての人形やその付属品、人形の登場するテキストや視覚的イメージが繁栄した状況を背景に、「ものを書く人形」というモチーフを通じて現実とフィクションの世界を横断しながら形成された〈母〉-〈娘〉関係の在り方を検討してきた。

当時の社会において子どもの代理物でありながら少女の倣うべきモデルであるとされてきた人形は、フィクションにおいて執筆する能力を与えられるや、女性たちの教育者たる〈母〉となり、物語や雑誌上の工夫を通じて〈娘〉である読者の女性たちと愛情に満ちた親密な関係を取り結んでいく。こうして築かれた〈母〉-〈娘〉のネットワークにおいて、母から娘へ、娘からさらにその娘へという生殖にもとづく垂直的な血縁関係を促進する道具であることを期待されてきた人形は、むしろそのサイクルを妨げ、ズレを生じさせる異物として機能した。そして当時の女性作家たちの言葉を代弁してもいたであろう〈母〉たる人形たちは、そのモノとしての性質によって、少女たちの欲望を喚起する装置となり、規範からの逸脱へと誘う潜在力を発揮したのである。

人形という存在を結節点として形成された女性間の想像上のネットワークの内部において、女性たちは人形の登場する物語を読みながら、自分の目の前にあるモノとしての人形と個々に関係を取り結ぶ。その経験はたとえばジョルジュ・サンド(George Sand)やミシュレの二番目の妻アテナイス・ミシュレ(Athénaïs Michelet)をはじめとする女性の著述家による自伝的作品において<sup>66</sup>、あるいはブルジョワ階級を中心とする当時の少女たちの私的な日記において綴られていた。彼女たちが実際に接していた人形たちに触れ、彼女たちが残した言葉に耳を傾けたとき、人形と女性を取り結んだ関係の内実、人形を通じて結ばれていった女性間のネットワークの様相はさらに

64 Lévy, *op. cit.*, p. 26.

65 Juliette Peersは当時の人形について、その派手なドレスや化粧から同時代のハイファッションや娼婦の形象に言及し、「家庭の天使」像を拒絶する反抗的な女性像との関連性を指摘する。Peers, *op. cit.*, p. 67. ラルース『19世紀世界百科事典』のpoupéeの項目には、「素行の悪い女性、娼婦」という用例が記されている。Pierre Larousse, *Grand dictionnaire universel du XIXe siècle : français, historique, géographique, mythologique, bibliographique.... T.12 P-POURP.* Paris, Administration du grand Dictionnaire universel, 1866-1877, p. 1551.

66 George Sand, *Histoire de ma vie. tome 4.* Paris, M. Lévy frères, 1856. Athénaïs Michelet, *Mémoires d'une enfant.* Paris, Hachette, 1867.

生彩を帯びて、わたしたちの前に描き出されることとなるだろう。